



# 女忍

白銀ノ沙希

神楽陽子

表紙イラスト：みかみん

試し読み版

二次元ぷち文庫

**当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された『女忍 白銀ノ沙希』に基づいて作成しております。**

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



白銀ノ沙希

# 女忍

神楽陽子

表紙 / みかみん

# 登場人物紹介

## Characters

---

さき  
**沙希**

世の中を乱す魍魎を狩る一族に生まれたくノ一。沈着冷静な性格で、冷気を操る技を使う。

かえで  
**楓**

沙希の相棒の女侍。沙希とは正反対の直情家。炎を操る技を使う。

うしゅうぐん  
**宇將軍**

亜の国を治める將軍。沙希たちに魍魎退治の要請を送った人物。

あ  
 亜の国は恵まれていた。作物の実り豊かな土地にあり、人々は名君の治めるその国で不自由なく過ごしていた——はずだった。

いまは城下町では手槍を持った兵があちこちを巡回し、擦れ違った住人が不安げに彼らの背中を見送るばかり。

ものものしい雰囲気に街じゅうが押しつぶされそうである。

いつもなら大勢の人々が往来して賑やかな大通りも、風の音さえ聴こえるほど不気味な静寂に包まれていた。人気の牛鍋屋や茶屋でも閑古鳥が鳴いている。

「昨日は南門の方で被害が出たそうな」

「恐ろしいことだ……」

雲がかつた空の下、城の絢爛な天守閣は滑稽なほどきらびやかに見え、寂しくすらある。「物の怪、か」

最初は誰も信じなかった、人を食らう化け物の話など。しかし日を増すに連れて犠牲者は増え、目撃者も相次いだ。運良く逃げおおせた者は恐怖のあまり狂ってしまい、話すこともままならない状態である。

亜の国を治める宇將軍はこの物の怪を退治するため、兵を総動員した。しかしそれでも化け物は現れて人を食う。

いま、この国は未知なる脅威に晒されていた。

その中をひとりの女が駆けていく。陽光を避けるように人の影から影へ、建物の影から影へ。一陣の風を残し、気配は残さず前傾姿勢で街道を走り抜ける。

身の丈は五尺二寸（約百五十四センチ）と小柄で細身の女性だった。肩で切り揃えた銀髪が真正面から風を受けて旗のようにはためく。

切れ長の双眸が前方の茶屋を睨んで、青く光った。

（——ハッ！）

壁に向かって減速せず、そのまま垂直に駆け上がる。彼女は空中で前転し、屋根の上に登ってようやくややく止まった。疲れた様子はなく、左手を腰に当てて街をぐるりと見回す。

青い瞳が長睫毛を少し押し上げた。

「亜の国か」

言葉はそれきり、艶やかな唇を顎からキュツと引き締める。端正な小顔を包むように髪が短くサラリと流れ、神秘的な銀色の光沢もようやく落ち着く。

細くたおやかな身に黒装束を纏い、両手には指抜きの手甲をはめ、背中には小振りな刀を左右対称に差した彼女は忍者。女の忍「くノ一」である。

機能性を最優先した装束には袖がなく、華奢な肩が露出しており、着丈は腿の接合部まで見えてしまいそうなほど極端に短かった。胸の膨らみはささやかなもので、腰の位置は

高く、無駄な脂がないせいもあって脚が細長く映える。

しかし脚を丸出し、という下品な格好でもない。

装束の下には襟元からもう一枚、網目状の薄生地をびつちりと肌に重ねており、両脚も太腿から脹脛まで薄網で引き締められている。くるぶしから先は紐で縛り、忍足袋を踵にしつかりと固定してある。

顔と肩でわずかに窺える素肌は、きめ細やかで雪のように白く、漆黒の装束とはあまりに対照的だった。

彼女の名は沙希さき。この地からは遠く山中深くにある「光深こうたんの里」で生まれ、人食いの化け物「魍魎もうりょう」と戦う術を伝授された者である。里の者は「狩人かりゆうど」と呼ばれ、これまでも魍魎の脅威から人々を守ってきた。

今回も亜の国から要請を受け、沙希が出勤することになったのだが。

「……遅い」

くノ一は少し眉を顰め、腕を組んだ。しばらくしてもうひとり、赤毛で派手な格好の女性も屋根の上にあがってくる。

「沙希、おまたせー」

仲間の女侍、楓かえでだった。沙希の睨み顔が鋭さを増す。

「時間厳守と言っただろう。情報は集まったか？」

「全然。まさか」

またこれだ。楓とは同期の桜で、里を出てからずっと行動を共にしているが、この女は戦闘以外で仕事らしい仕事をしたことがない。今回も情報収集と作戦の立案は沙希に任せ、街を見物していたようだ。

徹底して任務を優先する性分の忍者、沙希からすれば、これほど苛立たい相棒はいない。楓はそしらぬ顔で唐辛子をかじっていた。

辛いものが大の苦手である沙希が軽い頭痛に額を押さえる。

「……私の前で唐辛子を食うなど言っているだろう」

「あんたが食べるわけじゃないんだから、別にいいでしょ？」

愛煙家が煙草を吸う感覚で、相棒は唐辛子をかじる癖があった。常人離れた辛党なのである。もつとも、沙希も他人のことは言えないのだが。

「とにかく任務だ。さっさと魍魎を駆逐するぞ」

「さっさと、ねえ……」

楓が懐から甘味処のチラシを取り出す。

「亜の国にやけに急ぐと思つたら、こういうワケだったのね。お萩にみたらし団子」

楓が辛党なら沙希は甘党だ、それも常人では信じられないほどの。仕事を終えたら大国の茶屋で舌鼓を打つ算段である。

「この国って、菓子で有名なのね。あっちの方に店がずらっと並んでたわ」

「ずらっと……」

ごくくん。しかし任務が第一だ。

「ふ、ふん……私は貴様のように仕事中に食ったりはせん」

「はいはい、それで作戦は決まったの？」

沙希は城下町の地図を広げて見せた。

「これまでの魍魎の出現場所と時刻を調べてみた。あと、兵の警戒態勢をな」

「よくやるわね」

「……誰のせいだと思っている」

屋根の上でふたり向かいあつて屈み、地図に指先を走らせる。

「魍魎は決まって警備の薄いところを狙っている。睨んだ通りかもしれないぞ」

亜の国に呼ばれた沙希たちだが、入国は秘密裏に済ませた。それには理由がある。

楓も唐辛子を啜えたままで頷いた。

「んぐんぐ。じゃあ、城内の誰かに化けてるってこと？」

人肉、特に脳を食らった魍魎は、稀に人間並みの知性を得ることがある。沙希たち狩人

はそれを「頭魍魎」と呼んでいた。知恵のみならず戦闘能力にも恐るべきものがあり、逆

に狩られてしまった狩人もいる。

「よい刀だ、これからはワシが使わせてもらおうか」

魍魎が胴体を支える脚とは別の、イカの足に似た細長い触手で小太刀を無造作に振りまわす。自分の誇りでもある刀を玩具にされる屈辱。

そして。

「さて……子宮が壊れるまで産んでもらおうか」

沙希は嫌悪感に瞳を強張らせた。犯される、それも人外の化け物に。普通の娘ならすでに気が狂っていてもおかしくはないだろう。

しかし精神力の強い彼女は気がふれることもなく、現実を直視させられる。

（私が、も、魍魎の……子を、産むというのか……？）

青ざめた。血の気が引いた。ぶにぶにとした肉の触手で髪を梳かれ、ゾツとする。

「なっ、やめろ……くう！」

眉を顰めるくノ一の横顔をまじまじと眺め、魍魎が酷薄な笑みを浮かべた。

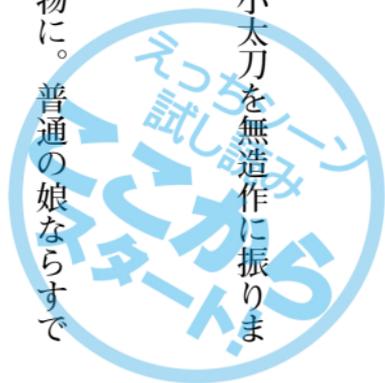
「なかなかの器量ではないか、喘ぐ顔が楽しみだな」

「私がそんな醜態を、はあ、貴様に見せてやるとでも？」

吐き捨てると。

「いつまで持つかな、ふふふふ」

さらに調子付いた魍魎は、乳房の上下を横に走る縄の間で黒装束を解いた。装束の裏で



首筋から太腿まで続く網生地一枚に包まれた、ささやかな膨らみが、輪郭も露に下向いてぷるんと飛び出す。

普段は意識することも無い乳塊で感覚神経が敏感になっていく。

(この……！)

網目状の薄生地にはうつすらと乳白肌が透き通り、頭頂は薄紅色に染まっていた。腕の動きを妨げることのない小ぢんまりとした乳房だが、脂が薄いだけに形が美しく、綺麗な左右対称になっている。

トクトクと羞恥に高鳴る鼓動を知られまいかと、沙希は下唇を噛んだ。

「ふふふ、触り心地はどうかかな？」

親指ほどの太さでどこまでも長い二本の触手が、左右の乳膨に密着してとぐるを巻く。薄網越しにもネバネバと絡みつく摩擦におどまじさが膨れ上がった。

「くうう、う……うう！」

しかし逃れようと身をよじれば、荒縄が余計に食い込んでしまう。人間の舌に似てぬめり輝く触手は、小さな女肉を捏ねまわしながら、網生地に隠れた蕾を何度も小突いた。

自分でも信じられないほど乳房は柔らかく形を変え、乳頭がビクン、ビクンと断続的に脈動する。眉を吊り上げて表情では不服従を維持しても、頬は朱色に染まっていく。

「ハハハ、もう感じているのか？」

「まさか！ ……ぐ、う」

沙希は身体の中で、意志とは無関係に何かが湧き上がるのを感じた。まだ微弱だが、次第に確実に大きくなっていく存在。

（感じる、わけなど……！）

首を振って思考からそれを追い出し、忌々しげに魍魎を一睨みする。この程度で音をあげて魍魎狩りが務まるものか。

その視線を、鋭利な刃が遮った。愛刀だ。

「……な、何をする気だ？」

白刃に映った自分の顔から目を逸らす。

惨めで見ていられなかった、また悔しさが込み上げてくる。

「この切れ味を少し試させてもらおうか」

魍魎は刀の峰でくノ一の前髪を梳きながら、装束を下から捲り、乳房と同じ薄網一枚だけの無防備な下半身を暴いた。両足首は距離をあけて吊るされ、大開脚、小振りな尻の谷間から秘めやかな縦溝まですべてが薄生地に浮かび上がる。

視界から消えた愛刀の切っ先が、沙希からは見えないそこへあてがわれた。自分の刀の切れ味なら自分が一番よく知っている。それをあえて、尻の溪谷で味わわされた。

冷たく鋭利な感触が谷間を上から下に駆け抜けていく。

「んく、ふうう……!!」

少しでも動けば身が切れてしまう。自ら可能なだけ股を広げて刃を通す。恐怖か、それとも別のものか、静止しようにも小さな震えが止まらなかった。

「震えているぞ、自分の刀に臆したか？」

「な、何を言っている」

ようやく切つ先は縦断を終え、網生地が綺麗に裂けた。つるんとして張りに恵まれた小尻が左右とも、谷間から半分ずつ露出する。

谷底に現れたのは、褐色の陥穽。小皺を一点に集めて内側に窄んでいる。

魍魎はあまった触手で、部屋にある蠟燭に火を灯した。沙希には意図が読めない。

「さて、まずはたっぷり仕返しといくか」

むしろ前方の女穴に意識が向いていた。見られはしまいか、触られはしまいか。どちらにせよ、鬼畜に屈するつもりはない。

ところが魍魎はくノ一の予想の裏をかいて、肛門を責め始めたのである。後ろの穴がジュツと燃え上がり、沙希は思わず目を見開いて声を吐き出した。

「んくあああ!!」

ドロリ、と尻の谷間を熱いものが流れた。首だけ振り向いて驚愕する。

溶けたばかりの口ウを肛門にまっすぐ垂らされたのだ。また一滴、落下する。

「はあああ！」

さすがの沙希も、もがくほど縄が食い込むのも忘れて悶絶した。

熱い。一滴一滴に宙吊りの腰でのたうち、呼吸の緩急を乱していく。

「や……やめろ、くうっ！」

「何をやめろと言うのだ？ 悦んでいるではないか」

「だっ、誰が——あ！」

灼熱は菊花の裏にも染み渡り、直腸を焼かれるかのようだった。冷気の漂う部屋の中でロウは増して熱すぎる。

尻穴の感覚が業火に包まれ、門が開いているのか閉じているのかもわからない。沙希は煮えたロウの流動に、自分がまさか汚物を垂れ流しているのではと錯覚に陥った。柳腰に纏わりつく黒装束を抜けた向こう、小尻の神経を研ぎ澄ませる。

（そ、そんなはずはない！）

直腸で異物感が急速に膨らみ、菊皺が緩んだ。ロウを浴びて肛門がヒクつき、黄ばんだ汁を滲出して裂けた網生地を肌に粘着させる。

（熱いだけだ、熱い……だけだ！）

沙希はいまにも萎えそうだった気力に活を入れ、意識を小穴に集中させた。魍魎の爪や牙で引き裂かれるのと比べればどうということはない、はず。

しかし不浄な穴は完全に制御が利かず、そこだけ別の生き物のように勝手に蠢いた。最初の一滴が固まる頃には括約筋も解れ、穴は出すでもなく呑み込むでもなく、人差し指が入るくらいの輪を広げたまま痙攣している。

全身に溢れる大量の悶え汗に沙希自身がハツとした。

「はあ、はあ……く、はあ……」

額と頬には銀髪がへばりついて離れず、口は呼吸に忙しく、咽は溜まった生唾を呑み下すだけの余裕もない。切れ長の双眸がかるうじて眉尻を押し上げているものの、涙の波紋が浮かんでいる。耳まで真っ赤だ。

細身が荒縄の中で窮屈そうに折れ曲がり、毛穴という毛穴が開いて牝の体臭が立ち込める。そこをさらに、触手が乳頭を摘んで引っ張った。

「ひぎいいいいッ!!」

もはや陵辱ではない、性拷問だ。すべての関節が悲鳴をあげる。しかし痛みのもとにはどこか心地よい余韻が残り、理性の堤防に黒い高波が打ち寄せた。

感じている——まさか。抵抗の意志を貫いていたはずの思考が濁り出す。

それでも満身創痍の沙希は魍魎に意地を見せた。

「はあっ、か、狩人を……舐めるな」

憎悪の念を燃やしていなければ自分を失ってしまいそうだった。その極限状態で、魍魎

「ぐうううう、だ……出せ……」

「すぐに出てくるぞ？ 数分もせぬうちにな」

沙希は逆さ開脚に病的な痙攣を走らせ、わななく唇を開いて舌を伸ばした。弓形に引き締めていた眉も虚しく倒れ、頬がさらに赤く上気する。

「う？ ううっ、くはああ」

腹の底で子宮がポコポコと煮立ち、重量もズシリと増す。最初は汁だけだった感触の中に固形物が見え隠れし、次第にそれが明瞭になってきた。

（な、なんだと……）

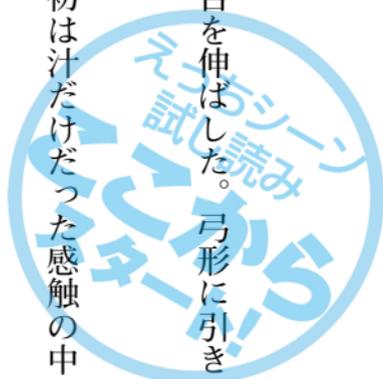
動いている。腹の中に「生き物」が、それも複数潜んでいる。しかし怖気に震えているのか、快感に震えているのか。いまの沙希には、何が自分の肉体を支配しているかさえわからなかった。

恐ろしいはずだ、それでも肉体は甘い拡張感に疼いてしまう。子宮で膨れ上がった質量が肉洞を底から広げていく。

「うぐううう!!」

「そろそろ一匹目、か……ふっふっふ」

荒縄に拘束されながらも下腹が盛り上がり、肉壺の底で、子宮口が鶏卵ほどある肉塊を吐き出した。



魍魎の幼体。絶望と戦慄に沙希が瞬きも忘れ、双眸を強張らせる。

「や……やめ、ろ……！」

内なる侵入者はヌルリとした身を秘粘膜に馴染ませながら、半回転も加え、狭道を強引に押し開いた。

ズリ……ズリ、ズリリッ！

「くっ、うあ、あ……ああああ」

さすがの沙希も艶やかな唇を輪にして、端から涎を顎まで零した。柔肉の中で、異物がナメクジのように身を伸ばす。

おぞましいからこそ、余計に幼体を感じて追ってしまう。

間もなくそれは処女膜に接触した。まさか、と思つて唇を引き結ぶ沙希。

「くうう……！」

しかし腰から下に力が入らず、極限状態ではもはや激痛か快感か区別のつかない、甘く痺れるようなものが全身を弛緩させる。

その隙に幼体が薄膜を裏から突き破る。秘孔が広がってブチンと裂け、瞬間、くノ一は四肢で縄を引いてしゃくりあげた。

「——んはああああ!!」

乙女の証を奪われた。それも、不気味で不浄な人外の化け物によって。もたげた首を支

えていられず、下向いてつむった目に涙を滲ませる。

秘粘膜を伸びきらせてようやく、最初の一匹が外に出た。

『ギキイイ!』

「あああああ!」

臍物のように血黒く、感触通りナメクジのような生き物だった。しかし排出だけでは終わらず、産まれたばかりの幼体は早速、蟻の門渡りをズルズルと這い上がった。

「まだ人肉を食うための牙がないからもう。糞を餌にさせてもらおうぞ」

「な、なん——ひぎいいッ!」

ロウも冷えて固まった、だが中は灼熱の渦巻く肛門に幼体が潜り込む。ブリブリと排泄に似て嫌な音が直腸で響いた。

ヌルリと軟体が奥へ奥へと滑り込み、尾てい骨の高さまで這い上がってくる。肉擦れが伴う愉悦はさらに背筋を駆け上がり、脳髓をジリジリと焦がした。

ズルズル!

ピクンと、くノ一の肢体が反り返った。

ズルズル、ズルズルズル!

「ひ……ひい、やあああ……!」

すすられている。沙希自身が直腸で醸成した「餌」を、魍魎の幼体が貪っている。抵抗

の意すら表すことができず、くノ一は手足で縄を引いて肛虐に悶絶した。

そのうえ。

「そろそろ二匹目か？」

子宮で次の幼体が形になり、身を引きずって開通した肉壺を抜けていく。沙希は魍魎の子よりも先に白濁を湧かせ、舵先の粒身から滴らせた。

「あ……ああ、んふああああ……！」

肉の輪が千切れんばかりに広がり、淫猥な摩擦を残す巨大な肉塊をヌルリ、と排出。吊るし上げられた沙希は首を巡らせ、銀髪を波打たせ、必死に餌場の肛門を閉ざそうとするのだが。

「ぐうっ、く……ひはあ？」

先に入った一匹目が裏からこじ開けてしまう。二匹目もニユルンと滑り込み、腸壁を吸引される凄惨な肛虐。そこから全身が裏返るかのように神経が剥き出しになっていく。二匹の幼体はすでに狭穴の容量を超えており。

幼体は早くも成長を始め、窄まる肛門から極細の触手を外にしならせた。三本、四本と競いあって伸び、菊花から生えたそれはまるでめしべのようだ。

それらの触手が腸液を滴らせながら、沙希の細身に絡みついていく。装束の裏を腰からうなじへ貫通し、網生地 of 脇や裂け目から直に肌にも吸いついてくる。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**